

移民第二世代青年期のエスニシティ間比較 (5)

—フィリピン系ニューカマーの事例—

○和光大学 額賀美紗子

○中京大学 三浦綾希子

1. 目的

外国にルーツをもつ子どもの低い学習意欲、不就学、進学困難が明らかにされる一方、ニューカマー第二世代の間には大学進学を果たし、日本社会でホワイトカラー職に就く者も出現している。本研究は Portes&Rumbaut (2001) の分節的同化理論やトランスナショナリズムの視角を援用しながら、国内におけるフィリピン系ニューカマー第二世代の学業達成と文化変容の分岐プロセスを明らかにする。具体的に次のリサーチクエスチョンを検討する。

① 学歴上位層と下位層の間にはどのような文化変容パターンの違いがみられるか。

② 家族の構造と受け入れ文脈は第二世代の文化変容パターンにどのように影響しているか。

特にフィリピン系に特徴的な国際結婚やトランスナショナルな家族のありかた、地域コミュニティや学校における包摂と排除に注目する。

2. 対象と方法

フィリピンにルーツをもつ 18 歳から 30 代前半の若者 20 数名を雪だるま式に集め半構造化インタビューを行った。対象者には、日比国際結婚夫婦の間に生まれた子ども、フィリピン人母親の連れ子、日系の子どもを含む。高卒以下と大卒以上の割合は約半分である。

3. 結果

対象となったフィリピン系の若者たちの間には、「主流文化型」「エスニシティ型」「ハイブリッド型」「反学校文化型」の 4 つの文化変容パターンが見出された。

「主流文化型」の若者は自分のルーツに否定的な感情を持っており、「日本人になりたい」という強い思いをもって主流文化に同化する姿勢をみせる。メリトクラティックな学校文化に適応し、高い学習意欲を示す一方で、親子間に軋轢も生じている。「ハイブリッド型」の若者はフィリピン文化を取捨選択的に維持しつつ、日本社会の主流文化も獲得する。この中にはフィリピンとの繋がりや英語力を「武器にして」大学進学や就職を果たす者もあり、トランスナショナルな紐帯やエスニシティを地位達成や自己肯定感獲得の資源とする戦略がとられている。

上記 2 パターンが学業達成に結びつきやすいのに比べ、以下の 2 パターンは高卒以下の者に見出された。「エスニシティ型」の若者は、フィリピン人としての自己意識が強く、フィリピンに強い愛着をもってフィリピン文化の維持に積極的な意味を見出す。母国の価値観や人間関係に拘束される程度が高く、しばしば日本の主流文化との衝突を経験する。「反学校文化型」の若者は、家庭でフィリピン文化の継承がされず、日本人としての自己意識が強い。学力低位層に位置づけられる日本人と親しい関係を築き、学校文化に対して批判的な見方や反抗的な態度を示した。

こうした文化変容パターンには、家族構造と帰属コミュニティ、ジェンダーが影響を与えていると考察できる。日本人の父親、フィリピン人母の日本人「ママ友」、日本人の教師や友人が学習を支える資源を提供している場合には「主流文化型」、そうした資源に加えて緩いトランスナショナルな紐帯や親を通じて文化継承がされている場合は「ハイブリッド型」になり、いずれも学業達成が促される。一方、トランスナショナルな家族の紐帯が強く、親子ともに日本の主流文化と関わる機会が限定的である場合には「エスニシティ型」、親からエスニック文化継承がされず学習資源が少ない場合は「反学校文化型」になり、いずれも学業達成を困難にしていた。

謝辞 本研究は科学研究費補助金基盤研究 (B) 26285193 の助成を受けたものである。